

2. 研究 成 果

設定課題 1.

群れの統合機構に関する研究

幸島群におけるハナレオスのinteractionの 分析

菅原 和孝(北大・文)

筆者は、すでに幸島のハナレオスについてその社会関係および社会的出会いの構造について報告したが(菅原, 1975; 1980), 今回はとくに、交尾期に群れに接近, 侵入したハナレオスと群れの成員とが混在する「密集空間」の生成と崩壊のダイナミクスに焦点を絞った。調査は1980年1月16日~2月28日まで行なわれた。幸島には、この時点で満9歳以上のオス20頭が棲息していた。前回調査した1978年交尾期と比較して顕著な変化は次の4点である。1) 1974年より一貫してハナレオスの順位序列の上層に位置していた2頭のオス, ゴリ(12歳)とザシン(13歳)が島外へ離脱していた。2) 10年以上ハナレオスの順位序列の最上層にあったイカ(22歳)は老齢化に伴って劣位の表出を頻繁にみせながら、群れと行動を共にするようになっていく。3) 1978年度には群れに対して著しく敵対的にふるまっていたゲシ(18歳)は、群れの成員たちによく許容されるようになっている。4) 現在、ハナレオスの順位序列の頂点にいと推測されるノスリ(14歳)はマキの家系を中心とした分裂群と完全に行動を共にしている。このようなそれぞれのオスたちの社会的位置の多様な変遷過程は、島に閉じこめられた孤立群のオスの生活史の特質を把握するうえで、貴重な資料となりうる。

「密集空間」の動態に関する資料は、現在分析中なので、方法論上の見通しを述べるにとどめる。a) 「平和的」にみえる多数の個体の近接状況の中にも agonistic interaction として顕現しない競合関係が想定される。b) このような潜在的競合を分析するうえで有効なのは個体間の優劣関係ではなく Stammbach (1979)の提起した Dyad の優劣度の概念かもしれない。c) social interaction として現われる以前の、社会的立場における個体の他、個体に対する近接指向性を分析する

手掛りとして身体定位を用いることができる。

最後に、筆者の調査中に突然、逝去された磯崎正富氏の御冥福を心からお祈りする。筆者にとって、氏と焼酎を飲みかわした幾多の夜こそが最も濃密な「島」の記憶を形づくっている。

嵐山における第2次分裂後の、新群の社会構造の変化および群間関係

高畑由起夫(京大・理)

中田千佳夫(岩田山自然遊園地)

1978年2月以降、嵐山B群の一部に顕著な sub-grouping が認められ、4月に分裂が完成したものと見なされ、嵐山C群と名付けられた。この群れは分裂の課程で相当数が捕獲され、4月の時点での個体数は12頭であった。

分裂の際の特徴として、Ⅰ)メンバーは分裂前5番目の家系順位にあった Kusha の血縁集団のほぼ全員と、血縁関係にない subadult, male 2頭(9才と5才)だった。なお、Kushaの血縁集団は、1970~1976年にかけて劣位であった Glance の血縁集団に順位を逆転されている。Ⅱ) Kusha のコドモのうち、K-688(当時15歳)と K-658(18歳)は、それぞれ第2位および第5位のオスであったが、以前から近接関係やグルーミングが見られなかった。分裂にあたり、彼らは血縁集団のメスに追従せず(というより、この分裂に対しほとんど関係せず)、B群にとどまった。

Ⅲ) 1978年3月に、B群の一部とC群がたびたび衝突したが、C群はそのたびに岩田山のエサ場周辺より追い出された。5月以降は、エサ場より北東の保津川右岸の観光用道路の付近に45日とどまった。

これらの現象は、血縁関係の判明している他の群れでの分裂の例(嵐山群の第1次分裂〔Koyama, 1970〕、勝山群の分裂〔藤井, 1974〕)でも、ほぼ共通している。

一方、分裂群に adult male が参加せず、分裂初期には当時27才と推定された Kusha が明らかにリーダーシップをとり、彼女の捕獲後は、その娘である K-69♀がリーダーシップをとったことは、adult male がいなくとも、メスでも十分リーダーとしての role をはたす能力があることを示している。ただし、彼らの間の血縁関係に基づく、

心理的な結びつきも、メスがリーダーシップをとったことに大きく関係しているものと思われる。

なお、この群れは1979年初頭にほぼ全個体が捕獲され、それ以降の調査は不可能となってしまった。

木曽山系に連続分布をするニホンザルの群れのグルーピング・パターンに関する比較研究

田中 進(マカク研)

村松正敏(マカク研)

木曽川左岸の上松町・大桑村一帯には、5つの野生群が生息している。それは、木曽川支流の滑川左岸の風越山北斜面に生息している群れ(K_e群)、東野地区周辺に生息している群れ(T群)、倉本周辺に生息している群れ(K群)、上郷周辺に生息している群れ(S群)及び倉本周辺に生息している個体数の小さい群れ(K_s群)である。

このうち、1979年11月のK群の個体数及び性年齢構成は、0歳個体が16頭、1歳から3歳個体が7頭、4歳以上のメスが27頭、4歳から7歳のオスが2頭、8歳以上のオスが10頭、性年齢不明個体が26頭の合計88頭であった。4歳以上のメスに対する0歳個体の割合は、59.3%、群れの総個体数に対する0歳個体の割合は、18.2%であった。これらの値はニホンザルの群れの大きさと構成についての記録によると、箕面B群(1955年センサス)及び小豆島S群(1956年8月センサス)の値とよく似ている。また、59.3%、18.2%という値はニホンザルの野生群の中ではやや高いように思われる(増井、1976)。

また、出産・死亡については若干の資料が得られたので、次年度の報告で述べたい。

遊び行動の集団間比較研究

— 勝山集団と淡路島集団について —

小山高正(阪大・人科)

小山幸子(〃・〃)

中道正之(〃・〃)

餌付け野生ニホンザル8集団の比較研究から、淡路島集団では個体関係が極めて親和的であるのに対し、勝山集団では順位関係が厳しいという相対する結果が得られた。この集団間差異は発達

段階の比較的初期から形成されていくものと考えられる。淡路島・勝山の両集団で幼体期の遊び行動および初期の母子関係に注目し当該集団の特性が個体発達の初期にどのように反映されているかを検討した。

観察は1979年6月から12月に両集団で0歳から4歳を対象として行われた。まず餌場を巡回し遊び仲間を記録し、遊び仲間がどのように形成されているかを分析した。淡路島・勝山とも、雌よりも雄が、年齢別では、1・2歳の個体が遊ぶ度合いが高いという同じ結果が得られたが、遊びに参加した2個体の年齢差からみると、勝山では年齢差が広がると遊びが著しく減少するのに対し、淡路島では年齢差が2歳ぐらいまで遊び仲間をよく形成する点に差異が認められた。

8mmフィルムに基づく遊びの行動要素の分析は、現在進行中であるが、勝山では優位と劣位のサルの間でいくつかの行動的差異が見られたのに対し、淡路島ではその差は明確でなく両集団の特性が反映しているものと考えられる。

生後直後から約3ヶ月までの幼体をハンセン法で追跡観察した。その結果、母子間距離は加齢に従い淡路島のほうが大きくなり母ザルから離れて広範に動くのに対し、勝山は相対的に母ザルに近接して活動する傾向が高く、さらに淡路島では幼体は成体との接触が比較的多くなり、逆に勝山では未成体との接触が多いという諸点の著しい集団差が抽出された。

両集団の相異なる集団特性は発達のかかなり初期に各個体に獲得され、遊び行動を含めた幼体の行動に反映されていることが明らかとなった。

設定課題 2

各環境構造における霊長類の適応機序の解明

志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植性

小見山 章(岐大・農)

I はじめに

志賀高原横湯川上流域では様々な植生型がモザイク状に分布している。今回は湖成層を含み地形が多様な本調査地において、地形と植生型の分布